

- 丹後ちりめんを取り巻く環境は生活様式や消費嗜好の変化等により呉服の需要が減退し、事業者減少が続き次世代への継承が困難な状況となっている
- 事業者間の連携等による販路開拓の促進や、工場周年養蚕の実践と高機能性シルクの研究から産業化につなげることで丹後ちりめんの再生を目指す

1. 京丹後市の概要と人口ビジョン

◆概要

- ・京丹後市は京都府最北部に位置し、山陰海岸ジオパークを構成する自然豊かで観光資源に満ちた街
- ・絹織物、機械金属、農林水産・観光業等の産業が中心で、中でも絹織物生産量が日本一(丹後地域計:絹織物と装用白生地)

◆人口推移・将来人口ビジョン

- ・昭和25年(旧市町時) 83,001人
 - ・平成27年5月1日現在推計人口 55,328人 (約60年で3割超の減)
 - ・平成72年将来推計人口(社人研) 26,469人 (現時点での推計)
- ⇒市の平成72年目標人口は7.5万人。(市は)市民が矜持を受け継いで検証し、戦略(施策)を展開すれば達成可能⇒潜在力を備えた**地場産業の再生が必要**



2. 丹後ちりめんの現状等

◆丹後ちりめんの歴史

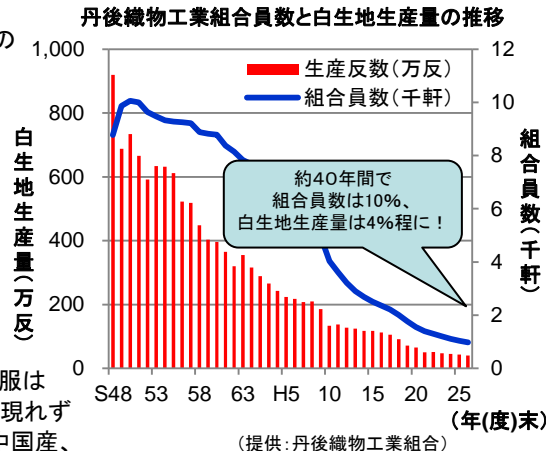
- ・丹後地方の絹織物生産の歴史は古く、奈良時代、朝廷に調貢した記録
- ・鎌倉・室町時代に豪華絢爛な絹織物が時の権力者に愛され、織物の里として認知
- ・江戸時代、当地を治めた宮津藩が養蚕業を振興したが、高級品であるため先細り、次第に衰退。江戸後期(1720年)、当地出身の絹屋佐平治が西陣の織物技法を持ち帰り、燃りの無い縦糸に強く燃りをかけた横糸を織り込むことで、精練(ニカワ質や汚れの洗流し)後、生地前面に細かいさざ波をうったような「シボ」を生じさせた織物(ちりめん)を完成、品質に優れた丹後ちりめんが脚光を浴びることに

◆丹後ちりめんの現状

- ・我が国の生活様式や国民の消費に対する嗜好の変化等により呉服の需要が減少、丹後ちりめんは厳しい時代へ
- ・丹後ちりめん事業者は高齢化し年々減少、生産量も減少
- ・組合員数: 977人(平成26年度末)
- ・※昭和50年度時1万人超⇒約40年間で10%程に
- ・白生地生産量: 40万反(平成26年)
- ・※昭和48年時919万反⇒約40年間で4%程に
- ⇒呉服市場は2兆円(ピーク時)から2,700億円程に

◆丹後ちりめん事業者の声

- ・成人式等人生の節目に購入されることが多い呉服は不況の影響を直ちに受け、好況の恩恵はすぐに現れず
- ・原材料の生糸はほぼ100%海外産(うち9割程が中国産、



より良質のブラジル産は欧米系ブランドの買い占めを受ける状況)

- ・事業者の高齢化が進み、機械を更新する経営体力が無い。また、西陣メーカーが受注生産へシフトする等から安定した生産(収入)が見込めず、後継できない状況

3. 丹後ちりめん再生の取組み

◆丹後ファッションウィーク事業

- ・大学等との連携によりデザインや新用途を開発し、首都圏や海外へ販路開拓
- ・最近では海外デザイナーと連携し、欧州でのショーに丹後織物生地が活用



◆シルクのまちづくり市区町村協議会

- ・絹産業の存続と、絹が持つ魅力や可能性を再発見し地域活性化につなげる情報交換の場として当市に同会事務局を平成22年に設立(現在、全国26市区町加盟)

◆事業者協調等による販売促進

- ・これまで無かった複数事業者の協調により「TANGO+」を設立、都市圏の大手百貨店を中心に販売促進活動を展開。また、海外市場開拓する単独事業者も

(提供:丹後織物工業組合)

◆工場周年養蚕の実践と高機能性シルク研究による新産業創出

- ・京都工芸繊維大学の研究指導により、年間を通して周年型養蚕を実践
- ・信州大学が行うスパイダーシルク(蚕が吐く絹糸にクモ糸遺伝子を組込)等高機能性シルクの研究開発に連携、閉校した小学校校舎を研究開発促進施設として整備し、京丹後産繭の量産化と高機能で特徴あるシルクの研究を実施運営
- ・スパイダーシルクは通常の生糸に比べ、引張り強度が2~3割高性能
- ・靴下やストッキング、紫外線防御の機能性を備えた生活用品を開発中

◎丹後ちりめんの技能と培われた文化を次世代に継承し、産学官が連携して販路開拓、研究開発を進め新たな産業化へ

4. 丹後ちりめんが抱える課題・期待

◆生産地としての現場維持の困難性

- ・事業者の高齢化、工賃の低下、設備の老朽化等が生産地としての維持が困難に(これまで幾多の困難を伝統ある丹後ちりめんは乗り越えてきた)

◆需要喚起・研究から産業化へ前進 (←頑張る地域に行政の継続的支援を)

- ・高機能性シルク研究について大学と連携し、行政主導による養蚕システム構築を推進する等、若者世代にも魅力ある産業化へ。時代のニーズを捉え、丹後ちりめんを進化
 - ・2020年東京五輪・パラリンピックを活用して丹後ちりめんの国内外へのPR等により需要を喚起
- ※2020年は丹後ちりめん創業から300年の記念の年